

付 編 2

- 1 若林 勝邦 1890「肥後旅行談」『東京人類学会雑誌』第5巻第49号 東京人類学会
- 2 杉村 彰一 1962「曾畑式土器文化に関する一考察」『熊本史学』第23号 熊本史学会
- 3 清野 謙次 1969「肥後国宇土郡花園村大字岩古曾字曾畑貝塚」『日本貝塚の研究』 岩波書店

1 肥後旅行談

若林 勝邦

余ガ今日述ベント欲スル肥後旅行談ハ三部分ヨリナレリ始ハ余ガ肥後ニ旅行セシ所以次ハ探究ノ報告終ハ自己ノ考ヘ得タル事實トス

余ガ帝國大學ノ命ヲ帶ビ肥後ニ旅行セシハ他ニアラザルナリ余ハ明治廿一年夏始メテ九州ノ陸地ヲ踐ムヤ豊前筑前筑後肥前ヲ旅行シ古墳或ハ塚穴ヲ實見シ人類學上ノ知識ヲ得ル少ナカラズ又石器時代ノ遺物ヲ散見セシガ故ニ其遺物ヲ熟視セシニコレ本邦新石器時代ノ遺物ヨリ少シク以前ノ時代ニ於テ製造セラレシガ如シ此事ハ本會ニ於テ嘗テ述ベシガ未ダ筆記セズ從テ雜誌上ニモ掲ゲザリシ其後青森縣ニ至リ龜ヶ岡ヲ研究シ同縣下諸地方ヲモ旅行シ石器時代ノ遺物ヲ調査セリ而シテ此地方ノ遺物ハ本邦新石器時代ニ属スルモノナリト思考セリ故ニ此北端ノ遺物研究ト西南端ノ遺物研究トヲ合セバ必ズ人類學上好結果アラン事ヲ知り今回更ニ肥後ヘ旅行シ此地方ニ於ケル石器時代ノ事實調査ニ從事セリ且肥後ハ天艸ノ内海ニ望ミ九州西南端中央部ノ海岸ヲ有セルヲ以テ嘗テモールス氏ノ研究セシ大野村ノ貝塚（大森介墳篇ニ小野村トアルハ大野村ノ誤ナリ）ノ他ニ尚遺跡遺物數多アルベキヲ信ゼシニヨレリ又モールス氏ノ大野村貝塚ノ研究報告ハ終ニ世ニ出デザリシニヨリ此地方ノ状態ハ充分知ルヲ得ザリシガ爲メナリ次ニ探究ノ報告ヲ記スベシ

余ハ昨年十二月二十八日東京ヲ出立シ本年一月三日熊本ヘ到着セリ以後熊本縣管内ヲ巡回シ一月三十一日歸京セリ今回研究セシ重ナル貝塚ハ宇土郡岩古層村（舊名曾畑村）ニアルモノ八代郡吉野村ニアルモノ全村字西ノ平ニアルモノナリ此吉野村ハ舊高塚村大野村（モールス氏ノ研究セシハ此地ナリ）ノ合併セシモノニテ貝塚モ兩村ニ跨レリモールス氏ハ大野村ノ貝塚ト呼ブモ實際ハ高塚大野兩村ノ貝塚ナリトス又字西ノ平ノ貝塚ハ舊高塚村ニ属セリ新町村制ニヨリ吉野村ノ名ヲ以テ高塚大野ヲ總稱セシハ貝塚ノ所在地名ヲ指示スルニ於テ都合ヨキ大野村ノ名稱ニシテ隠レハ惜ムベシ何トナレハ大野ト云ヘル地ハ多ク石器時代ノ遺跡ヲ發見シ研究スベキ點アレナバナリ余ガ又遺物ヲ採集シ得タル地ハ葦北郡大野村下益城郡大野村ノ貝塚託麻郡戸島村全永嶺村合志郡ニタ子原全龜尾村山本郡内村全清水村山鹿郡名塚村ナリトス先ヅ貝塚ヨリ述ブベシ

宇土郡ハ肥後ノ西部ニ位シ有明ノ海及ビ天艸ノ内海一部分ニ望ム中央平カニシテ東部丘陵多ク起伏セリ此丘陵中木原山ト稱スル丘アリ其麓ニシテ西南ノ地ニ貝塚アリ今畠トナル面積凡ソ七畝貝殻堆積ス厚サ凡ソ三尺トス昔ハ二三町ニ渉リシガ如シ近傍ノ畠ノ地底或ハ小逕ノ側面ニ貝殻アルヲ見ル現今ハ海岸ヲ距ル事近キハ一里遠キハ一里半ナリト云フ然レドモ此貝塚ノ西北ニアル宇土山ト云ヘル丘ハ土俗宇土島ト呼ブヲ見レバ昔時海水ノ此近傍ニ來リシ一證トスベシカ曾テ肥前島原ノ崩ル、ヤ海嘯宇土山ノ下ナル宇土驛ヲ浸スト此驛ハ貝塚ヲ距ル僅二十丁餘ナリ然レドモ貝塚ハ地高ク海水ノ侵入ヲ免カレタリト云フ地質局出版ニカ、ル地質報文本年第一號ニヨレバ宇土驛ハ地質學上第四紀層中沖積層ニ属シ木原山及ビ貝塚ハ第三紀層ニ属セリ而シテ余ガ此貝塚ヨリ發掘シ得タル所ノ遺物ハ左ノ如シ

- 一 石器 石斧一個
- 二 土器 瓶類ノ縁、底、腹部數個
- 三 骨 獸骨一個
- 四 貝殻 牡蛎、蛤、さゝめ、あさり、志ゝがひ、數個

石斧ハ稍磨キ刃ヲ有ス、土器ハ縁、腹部二種々ノ模様ヲ附ス刻ミ目ノ並行アリ斜線ノ交叉アリ表裏ニ書

ケル斜線アリ縄紋ヲ印セルアリ各趣ヲ異ニセリ底ニハ裏面ニ編物ノ痕ナシ土器中僅ニ一殘片ニ赤キ染料ヲ塗レルモノアリコヽニ記セル土器ハ云フ迄モナク皆貝塚土器ナリ以下同ジ獸骨ハ何ノ獸ナルヤ詳カナラズ

次ニ記スベキハ八代郡ノ吉野村ノ貝塚ナリ此八代郡ハ肥後西部ノ中央ニ位シ天艸ノ内海ニ望ミ大古人民ノ居ヲ選ムニ最好ノ地ナリ此等ノ原因ニヨレルモノカ當郡吉野村ノ貝塚ハ面積廣ク凡二丁四方ニ涉レリ又貝殻ノ積モレル事厚サ凡四五尺ヨリ四間ノ間ニアリ此貝塚ノ下ハ八代街道ニシテ通行ノ際仰キ見レバ貝殻斜ニ積リ西南ノ丘腹一畛ヲ掩フ丘ノ最高ノ部分ハ土現ハルヽモ他ハ土ヲ見ル能ハザルナリ此街道ノ下ハ漸々低ク最低地ハ街道ト二間餘ノ差アリ田畠相連リ壹里半ニシテ天艸ノ内海岸ニ達ス此低キ地ハ昔海水ノ浸セシ所ナルガ現今ノ八代街道ノ下ヨリハ加藤清正ノ肥後ニ封ゼラレシ以來新二埋メ終ニ今日ノ如クナリシト云フ而シテ今日ノ八代街道ハ通ゼズ吉野村貝塚ノ東北ニ當レル種山ト稱スル山道ヲ經テ八代ニ至リシト云フ土俗船繫キ松ト稱スル松貝塚ノ傍ニアリ又貝塚ノアル丘ノ頂上ニ至レバ西方ニ天艸郡ヲ望ミ北方ニ木原山ヲ見ル下益城郡大野村ノ如キハ眼下ニアリ余ガ此貝塚ヨリ發見シ得タル遺物ハ左ノ如シ

石器 石斧 三個

土器 瓶壺類ノ縁、底、腹部、柄手數個

骨 鹿骨、猪牙、齒、人骨、數個

貝殻 牡蛎、蛤、さゝめ、あげまき、たにし、河にな數個

石斧ハ稍磨キ刃ヲ存スルモノ二個アリ他ノ一個ハ細クシテ磨ケル事前ノ二個ニ比スレバ少シク巧ナリ巾廣キ部分ハ欠損セルモノ巾狭キ一端ハ一方ノ面ヲ研ギ刃トナセリ土器ハ種々ノ模様ヲ附ス刻目ノ並行シテ屈曲スルアリ曲線ノ對スルアリ縦線ノ並行アリ縄紋ヲ印セルアリ縁ハ波形ヲナス柄手ハ耳形ヲナセリ底ノ裏面ニハ編物ノ痕アルヲ認メズ鹿角ハ又ノ部分猪牙ハ一個、下齶ニ生ゼル齒數個、人骨ハ脛骨一個ナリ貝殻ハ鹹水産ト淡水産ノ二種アリ

次ハ吉野村字西ノ平(舊高塚村字西ノ平)ノ貝塚ヲ發掘シ石斧貝塚土器、貝殻ヲ得タリ石斧ハ稍磨ガケリ此西ノ平貝塚ハ今畠トナル面積數十坪アリ吉野村貝塚ヲ距ル數町ナリトス

貝塚ノ記事ハ此處ニ止メ次ニ石器ヲ採集セシ地及ビ出處地ヲ述ベン

雲根志後篇ノ四鎌石ノ條ニ肥後葦北ヨリモ稀ニ出ル云々ト記シアルガ故二世ノ石鎌ノ事ヲ云フモノハ多ク此書ニヨリ肥後國葦北ニ出ヅト記スルモ葦北ハ郡名ニシテ全郡中ノ何處ナルヤ知ル能ハザリシガ今回全郡大野村ナルヲ知り得タリ然カモ其地ニ至リ同村中宇下ヶ原ナルヲ知り得タリ此地ヨリ出デタル石鎌三個ノミナラズ石ヒ一個石斧四個石環一個ヲ得タリ石斧四個ノ中二個ハ打カキテ後稍磨キタルモノナリ他ノ二個ハ始メヨリ稍磨ケルヲ見ル石環ハ半バ欠ク、徑凡三寸トス此石環ノ類ハ神田孝平君ノ大古石器考第十三版十三圖ニモアリ徑凡二寸トス北海道ヨリ出シモノナリト記セリ又本誌第四十七號一四四頁ニ坪井正五郎君ハバリー萬國博覽會ニテ一見サレシ三個ノ蛇ノ目形ノ磨製石器ヲ記サレシガ圖ニヨレバ其形狀類似セリ其中二個ハ徑四寸計リ一個ハ徑二寸五六分ト云フ余ノコヽニ記セル石環ハ内孔ノ徑八分大古石器考ニアル石環ハ内孔凡五分ナリ次ニ下益城郡大野村貝塚ニ至リ蛤、しゝがひ、貝塚土器、破片ヲ得タリ次ニ託麻郡戸島村ニ至リ龜製石斧四個ヲ得隣村永嶺村ニ至リ稍磨ケル石斧ノ一片ヲ得次ニ山本郡内村ニ至リ同村畠ヨリ深迫氏ノ採集セシ磨製石斧一個ヲ得又同郡清水村ノ磨製石斧一個ヲ得又山鹿郡名塚村ト上吉田村ノ堺ナル吉田原ニ至リ石鎌ヲ得其他合志郡ニタ子原、杉水村、龜尾村ヨリ出シ石鎌ヲ得熊本市坂口氏宅ニ於テ合志郡立田山三軒屋ニテ得シ石斧二個ヲ見ル其中一个ノ石斧ニハ帆立貝ノ小ナルモ

ノ附着シオレリ又佐々干城氏ノ祖父ガ居ヲ本妙寺山ノ麓ニトセシ際掘リ得タル石斧一個ヲ見ル又合志郡龜尾村ノ石斧ヲ見ル共ニ出處明カニシテ参考ノ資トナレリ余ガ今回ノ旅行ニツキテ知リ得タル人類學上ノ知識ハ第一當國石器時代ノ遺跡散布ノ概略ニシテ此遺跡ハ多ク大野ト名クル地ニ於テ發見シ得タルコト而シテ此遺跡中ニハ貝塚アル事又石器ノ如キ遺物ノミ發見スル場所アル事ナリコヽニ記セル貝塚ハ本邦ノ本土及ビ北海道ニアルモノト同クシテ同人種ノ手ニナリシモノト考フルヲ得ルナリ

次ハ石器時代ノ遺物ニツキテ啓發スル事多シ特ニ石斧ヲ熟視スレバ製法ノ僞ナルモノ十分ノ八九ニ居ル之ヲ北海道青森縣ノ地方ヨリ出ルモノニ比スレバ製法未ダ進マズ磨リ截リテ造リ石斧ノ如キハ見ザルナリ從テ側面ヲ磨キシモノ或ハ截リ目ノ痕アルモノヲ認メザルナリコレ製法ノ拙ニシテ一個ヅヽ自然ノ石ヲ持チ來リ一個ヅヽ石斧ヲ造リシヤ知ルベシ余ガ筑後ニ於テ採集セシ石斧及ビ實見セシモノニ同ジコレ本邦新石器時代ニ進ム前ニアリシモノト考フヲ得ベキナリ(本邦新石器時代ニ屬スル遺物ハ東洋學藝雜誌九十七號ニ出セリ)精ク言ハゞ肥後ノ石斧ハ本邦石器時代ノ中ニ於テ特ニ北部ノ遺物ヨリハ製造使用サレシ時期ノ舊キヲ見ルナリ次ニ貝塚土器ヲ見ルニ其製法ハ青森縣下ヨリ發見セル精製ノ土器ニ比スレバ肥後ノ精製土器ト認ムベキモノハ僞ナルヲ知ルナリ模様中繩紋ハ本邦諸處ヨリ發見スルモノト肥後ニ於テ發見スルモノト形ニ大小アルノミニシテ異ナルナキナリ然レドモ模様中或ルモノハ一種他地方ト異ナル點アルヲ見ルナリ恰モ青森縣下ノ貝塚土器ニ一種ノ趣ヲ存スルガ如シ(此事ハ陸奥ノ貝塚土器數多ヲ實見セシモノハ容易ニ解スル處ナリ)

之ヲ要スルニ石器土器ヲ比較シ其製法ノ術ニツキ其進歩ノ度ヲ視レバ本邦石器時代中肥後國ハ本邦北部特ニ陸奥地方ニ於ケルヨリモ早ク人類ノ棲息セシヲ知ルベキ也

附言從來本邦石器時代ノ事跡ニツキテハ本邦西部ヲ研究セシモノ少シ實ニ遺憾ノ至リナリ北部ハ多ク石器時代ノ遺物ヲ發見スルガ故ニ屬世人ノ注意ヲ促セリ之ニ反シテ西部ハ遺物ヲ發見スル事少キガ故ニ世人ノ注意モ薄カリシ然レドモ充分搜索セバ尚數多アルヲ見ルナリ而シテ北部ノ遺物ト比較セバ互ニ有益ナル説明ヲ得ベシ舊東京大學教授モール氏ハ夙ニ肥後ニ至リ大野村ノ貝塚ヲ研究シ石器土器人骨ヲ得シガ(此採集品ハ理科大學人類學室ニアリ)報告ヲ世ニ公ニナリシヲ聞カザルハ遺憾ナリ

コレ今日迄肥後ニ於ケル石器時代ノ有様ヲ充分知ル能ハザリシ一原因ナリ又其當時ニ於テハ本邦西部ニ此大野村ノ貝塚ノミ知ラレシガ故ニ本邦西部ニ於ケル石器時代ノ有様ヲ知ル能ハザリシ原因トモナレリ

理學士坪井正五郎君ハ明治二十一年冬豊前ニ至リ會員小川敬養氏ト共ニ筑前鞍手郡木月村ノ貝塚ヲ發掘シ土器獸骨ヲ採集シ又嘗テ此地ヨリ出シト云フ石斧一個ヲ携ヘ歸ヘラレタリ又會員寺石正路氏ハ廿二年夏前ニ記セル肥後宇土郡岩古層村ノ貝塚ニ至リ筑前鞍手郡木月村貝塚ニモ至リ新ニ鞍手郡楠橋村ノ貝塚ヲモ發掘サレタリ此ノ如ク會員諸君ノ西部地方ノ遺跡ニ注意アルニモカヽワラズ其報告ノ雜誌上ニ現ハレサルハ遺憾ナリト云フヘシ因テ余ハ更ニ坪井寺石ノ兩君ニ其報告ヲ寄贈サレン事ヲ希望シ又余ガ缺ヲ補ハレン事ヲ請フ大島町ノ貝塚ハ地學會員鈴木敏氏ノ報ニヨル此處ヨリ得タル貝塚土器ハ理科大學ヘ寄附サレタリ

(『東京人類学会雜誌』第5卷第49号, 東京人類学会, 1890年)

2 曾畑式土器文化に関する一考察

杉村 彰一

プロローグ

縄文文化早期初頭の土器群としては、関東地方の南部、東京周辺から三浦半島方面、東京湾の西部に分布する撚糸文土器群がある。

早期縄文式土器について次のような編年がなされている。撚糸文土器群の次に無文土器群→沈線文土器群→条痕文土器群と変移する。

それでは関東地方以外の地域ではどうかというと、撚糸文土器群に並行するのではないかと考えられるものに、中部地方の一部にかけて分布する押捺文土器群が知られつつある。撚糸文土器群の終りに近い頃か、或は無文土器群になってから、北関東、中部地方から西にかけて押型文土器群があらわれる。

関東地方の無文土器群の終末になって、北海道、東北地方、関東地方の大部分にかけて沈線文や貝殻文をもった一群の土器があらわれる。

これらは早期初頭にかけてあらわれる土器群であるが、それらとは異なった土器群が九州の西部に分布する。曾畑式土器がそれである。曾畑式土器が縄文文化の成立にどのように関与しているのか、或はないのか、この問題を解決するのが、私の論文のねらいの一つでもある。

私が九州地方の縄文文化に位置する曾畑式土器を取り扱うことにしたのは、次の点からである。それは曾畑式土器文化の内容がいまだ明瞭にされていないことである。

残念ながら曾畑式土器が学術調査によって発掘された例は数少ない。学術調査によって層位を確認し、層の移り変りにしたがって各層に含まれる曾畑式土器の変移が見出せば一等資料としてつかえるだろう。

そのように恵まれた例は少ないので現存する資料を様式によって分類し、合理的な解釈をこゝろみようと思う。

一型式について次のような理解のしかたがある⁽¹⁾。『一型式 a はある限られた地域で、限られた時間につくられた土器の組合せをいう。その型式 a はそこで生まれ、土器を作り、用い死んだところの人間の集団を意味すると解する事が出来る。考古学的遺物を人間の歴史的遺品として把握するための最小の単位が「型式」であると。』型式の解釈を以上のようにすると曾畑式土器は再検討しなければならない。

歴史上の発展について次のことがらがありうる。一地域の文化のある時期に他の高度の文化が伝えられその内乱を通じて既存の文化が中枢部において粉碎され、それにとってかわって内乱を指導した人々の文化が新しく樹立されることもあろう。また、内乱にもかゝらず既存の文化はその本質をかえることなくたゞ内乱を通じて既存の文化が修正されるか、あるいは再新されるか、また、崩壊への転期となるかである。それから内乱もなくそれ自体の内的な変化や発展がありうる訳である。以上のことがらが曾畑式土器文化の研究を通していえるかどうか。

九州の考古学者のなかには九州では縄文文化後期頃まで、押型文土器が存在すると考えておられたが、最近になってそうでないことが明らかにされた。私はこの押型文土器については全国的な押型文土器のあり方より考えて慎重に検討してゆく。曾畑式土器と押型文土器との関係については、学術調査に於て両者の関係が層位的に把握された資料に重点を置いて論を進める。

曾畑式土器と大陸に分布する櫛目文土器（カムケラミーク）については、多くの学者は両者の文様、

胎土その他の類似から速断に結びつけて考えられているようであるが、私は曾畑式土器文化のあり方を早く明らかにするのが急務と考える。

1 曾畑式土器の形態

一般に曾畑式土器と呼ばれているのは、次のようなものである。熊本県宇土郡宇土町曾畑貝塚から出土した深鉢形丸底土器を標式として曾畑式が設定された。細型刻文又は細直細文土器等と呼ばれる灰黒色、黄褐色を呈するもので比較的薄手のものが多く胎土に滑石粉末混入のものが多い。繊細な篋状の施文具で平行刻線、刺突文、連点文、平行沈線、三角形細線文（鋸歯文）、羽状文等幾何学的文様をほどこした土器である。

曾畑式土器は九州地方に限って出土するもので、西北部から南部（福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、鹿児島県）にその分布をみる。

曾畑式土器の出土例は約60ヶ所を数え、特に熊本県下の出土例は30余ヶ所にのぼる。曾畑式土器が学術調査によって得られた例は少ないので、現存する資料を様式によって分類することにした。

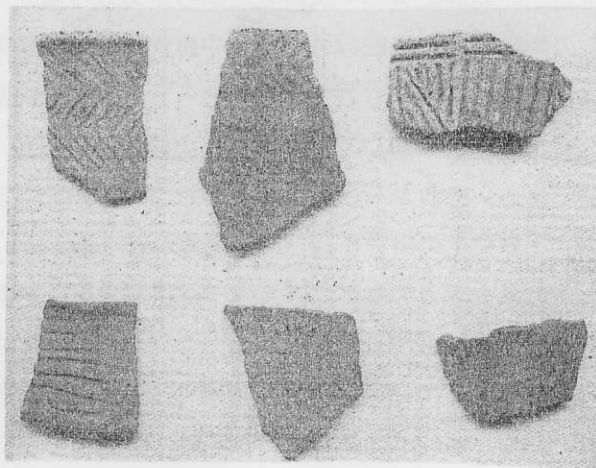
第一類は佐賀県唐津市西唐津海底から発見された曾畑式土器⁽²⁾をタイプとするものである。すべて破片であるから復元困難であるが、知りうることは次のようである。

口辺部、胴部に施される文様の組合せには規則的なものがある。口辺部は直口するものと外反するものとがあつて、外反する口辺部が数を上まわる。口唇上面に刻み目がある場合は口辺部が外反するの多い。内面に文様がある場合は外面の第一文様帯が施される。例えば外面の第一文様帯が横の平行沈線文であれば内面の文様は横の平行沈線文であるわけである。縦の平行沈線のみで文様帯を構成することはない。二本単位の鋸歯文（三角文）が施される場合それは横の沈線の上に施文されている。まれに一本単位の鋸歯文が横の沈線の上に施される場合がある。鋸歯文が文様帯を占める場合は一本単位で、鋸歯文の他の部分は斜の沈線でうずめている。鋸歯文は口辺部に限られる。刺突文（連点文に近い）が施される場合は主に口唇直下に施されている。

頸部にある場合は必ず口唇直下にも刺突文（連点文）がある。いわゆる刺突文（連点文）が口辺部になくて他の部分に施文されることはないのである。口辺部に施される最初の綾杉文は左開きであつて胴部以下に施される場合、最初の綾杉文は右開きである。



1. 佐賀県唐津海底発見（松岡氏蔵）



2. 熊本県曾畑貝塚出土（熊本市博物館蔵）

底部は平底に近い丸底と、丸底がある。前者の文様はいわゆる蜘蛛巣状を呈し、後者の場合は横の沈線である。

おそらく器面全体に文様が施され、全ての土器中に滑石粉末を含み、篋状の工具で施文したものといえる。しかも施文具は篋状のもの一種類と考えられる。唐津海底出土の曾畑式土器をいくつかに分類する必要はないと考える。唐津海底出土の中に大陸に分布を示す櫛目文土器とまったく同一の土器が5, 6片ある。

第二類とするのは、熊本県宇土郡宇土市曾畑貝塚出土の曾畑式土器⁽³⁾である。形態はわずかに口唇部の肥厚したものがあり口辺部のやゝ外反するものと、直口するものと二種で胴部は弯曲しない深鉢である。底部は丸底と平底がある。文様は篋状の先端で平行する沈線を横縦斜に組み合せたものと、竹管先端で施文した連点文、刺突文等である。口辺部の上面から胴部の下面まで文様が施される。わずかながら地文に条痕を残し、意匠文として曾畑式土器の特徴である幾何学的文様が施される。曾畑貝塚から出土した曾畑式土器に胎土に滑石粉末の混入しているものと、そうでないものがあるがいずれも文様上の相異は見出せない。

外面の文様はやはり第一類と同じく組み合わせには規則的なものがある。内面の文様について述べると、外面の第一文様が内側の文様と同一なもの。外面の文様は横走する沈線に斜の沈線が加わった文様で、内面は横走する沈線であるもの、また、外面の文様は横走する沈線で内面は横の沈線に斜の沈線の加わったもの。その次に外面の文様と内面の文様が違ったもの等である。

第三類とするのは鹿児島県大口市山野日勝山出土の曾畑式土器⁽⁴⁾である。採集された土器片はいずれも小破片であって復元困難である。詳細に検討するとおそらく平坦な垂直線をなし胴部はやゝ張って底部は丸底を呈する鉢形の土器であったと思われる。文様は横縦斜の沈線を組み合せたもの、連点文、刺突文、曲線文等に大別される。これらの文様が相互に組み合さって文様効果を上げている。曲線文が多量に出てくるのは日勝山の特色である。連点文及び刺突文は主として口辺部近くに横位二列及び三列に施されており口辺部の文様を構成している。この種の施文方法はおそらく篋状の先端等を使用して刺突されたものと思われるが、一部植物の茎を横断し、その篋状の横断面を押圧して施文したと思われるのがある。

2 曾畑式土器の編年的位置

曾畑式土器の編年的位置を考えるにあたって押型文土器、貝殻条痕文土器等について述べてみる。

昭和33年、4年に佐賀県小城郡東分竜王遺跡⁽⁵⁾が調査され次のような層位が確認された。だいたい5層から成りたっていた。第1層の耕土は淡灰黒色土で遺物はほとんど見られない。第2層は主に御領式を出す層で、第3層は主に阿高式が出土し数片轟式も出土している。第4層は曾畑式の出土の層で同層の下位から押型文土器（楕円文で器壁は厚く、楕円文は比較的大きい）が数片出土している。最下層の基盤は帯黄褐色砂層であった。

昭和34年10月江坂輝彌氏等が熊本県曾畑貝塚を調査されて次のような成果をおさめられた。貝塚は6層からなっていて第1層は15～20センチメートルで無遺物層であった。第2層は5～10センチメートルの厚さで第1貝層と呼んでいる。土器は鐘崎式に近い土器片、市来式に近い文様をもつ土器が出土した。これらの形式の土器は第1貝層（第2層）直下の第3層の上面からも発見されている。第3層は小石を混えた黒褐色土層であった。第4層（第2貝層）は少々小石を混えて厚さは30～45センチメートル前後

南部九州縄文時代編年表

早期	押型文文化	
	轟下層	
	曾畑 沖の原	石坂
前期	日本山	
	轟上層	石坂
		手向山

であった。第5層は褐色土層で40～50センチメートルの層である。第6層は紅灰色で小石を混えた粘土の基盤であった。

第3層下部から第4層（第2貝層）と第5層上面にわたって曾畑式土器が多量に出土した。第5層の上半分からは、表裏に篋状で施文した結果出来た細隆起線の土器が出土した。第5層には曾畑式土器、貝殻条痕文土器、押型文土器が出土したのである。この押型文土器は平底で円筒形をした深鉢であろうと思われる。阿高式土器の出土はなかった。曾畑貝塚に於ては押型文土器は曾畑の層より下層より出土したのである。押型文土器自体は新しく熊本市カブト山出土の押型文と同時期と思われる。

佐賀県多久市西多久板屋綿打遺跡⁽⁶⁾では曾畑式土器出土の層より下層から押型文土器の出土があった。福岡県小倉市平尾台御花畑⁽⁷⁾では曾畑式土器がやはり押型文土器より上層から出土している。

以上数カ所の例をあげてみたが、曾畑式土器は押型文土器文化の後に位置すると思われる。

貝殻条痕文土器の出土は九州全土にわたっている。曾畑式土器が出土するところはだいたいに於て貝殻条痕文土器の出土がある。唐津海底、竜王遺跡、長崎県平戸、福岡県沖の島、曾畑貝塚、日勝山遺跡、鹿児島県手向山遺跡、熊本県轟貝塚、同沖の原貝塚。

同じ貝殻条痕文土器と云っても特に九州南部に分布を示す吉田式は貝殻腹縁文で、石坂式と云われる土器は口辺部の文様は貝殻腹縁文で胴部は貝殻条痕文の土器である。

曾畑式土器はこの貝殻条痕文である石坂式、吉田式と同一層から発見された事はない。

昭和33年7月熊本県宇土市宇土町宮之庄轟貝塚を調査された松本雅明熊大教授は次のような事を報告された。比較的原状を保っていた層については6層からなっており第1層は貝の細片を交えた表土。第2層はカキを主とした純貝層であり、第3層は混土貝層。第4層はアカガイを主とした純貝層であり、第5層は黒土層、第6層は黄土層（基盤）であった。各層から出土する土器をあげると第2層から阿高式、第3層の下半部から轟式と云われるものが出土した。同層から出土した轟式土器は地文に貝殻腹縁文を有しその上に土をはりつけた云わゆるミミズばれの土器であった。第4層からは貝殻や篋状の先端で突いて出来た連点文、爪形文の土器が出土した。第5層出土の土器は第4層とほぼ同一土器であった。

轟貝塚に於て轟式土器を分類することは出来なかったが、たゞ傾向として云えることは轟式を包含する層で上半部から、地文に貝殻条痕を持ちその上に指で土をはりつけて大きな強いすじをつけ、そのミミズばれの大きな文様を示す轟式土器が出土したこと。その下半部から曾畑式土器と、平行する沈線を主体とするがその間にアルカ属の貝殻口唇を押捺した文様を配した土器が出土した。これより下層に土器がごく柔らかい時貝殻の先端や篋の先で表裏を引きかき、ミミズばれが出来たもの。この文様をもつ尖底土器2個が出土した⁽⁸⁾。

轟貝塚においては、最下層の貝殻条痕文土器が出土する上層に曾畑式土器と、曾畑式土器の伝統と考えられる土器が存在した事実は認めなくてはならない。伝統の残る土器については後述する。

昭和34年8月熊本県天草郡五和町沖の原貝塚の調査⁽⁹⁾が行われた。沖の原貝塚は5層からなっており最下層から曾畑式土器数片、轟貝塚において曾畑式土器と同一層から出土したところの平行する沈線を主体とするがその間にアルカ属の貝殻口唇を押捺した文様を配した土器が、沖の原貝塚に於ても出土した。貝殻腹縁で押捺した土器（この土器と類似したものは鹿児島県日本山遺跡から出土している）と地文に貝殻文を施文しその上に隆起文を配したミミズばれ土器、いわゆる轟式が出土した。最下層からは

大きく分けて曾畑式土器片と曾畑式土器の伝統の残るところの地文に貝殻条痕を施し、平行沈線のある土器とそれに貝殻腹縁文土器が同一層から出土したことである。轟貝塚でも曾畑式土器数片と、曾畑式土器の伝統の残る土器は同一層から出土した。轟貝塚でも沖の原貝塚でも曾畑式土器と曾畑式土器の伝統の残る土器は同一層から出土し、しかも曾畑式土器よりも曾畑式土器の伝統の残る土器が数に於て圧倒的に多かった。轟貝塚に於ては曾畑式土器の伝統の残る土器の出土する上層からミミズばれの轟式が出土した。沖の原貝塚に於ては同層からミミズばれの轟式と曾畑式土器、曾畑式土器の伝統の残る土器、それに日本山式土器に類似する貝殻腹縁文土器が出土し、いわゆる日本山式的なものが他の土器よりも圧倒的に多く出土した。轟貝塚と沖の原貝塚の両貝塚に於ていえることは曾畑式土器の伝統の残るのは貝殻腹縁文土器であって、曾畑式土器の要素であった沈線は時とともに貝殻腹縁文に圧倒され消えていく。曾畑式土器の伝統の残る土器文化について一型式もうけていゝかどうかかわからないが、私は沖の原文化期と呼んだらどうかと考えている。この沖の原文化こそ日本山式土器文化につながりミミズばれの土器つまり轟式文化を産み出す基調が芽ばえていたと考える。

私は前頁のような編年をこゝろみた。

3 曾畑式土器文化の様相

九州西部に限って分布を示す曾畑式土器文化は縄文時代早期末に比定されるべきものであった。曾畑式土器文化は押型文土器文化、貝殻条痕文土器の後に位置する文化であった。曾畑式土器文化は押型文土器文化、貝殻条痕文土器文化から自然的な形で発生したものではなく九州に於て押型文文化が終り、貝殻条痕文土器文化にはいり一部の地域でその発展を呈しようとした時に、曾畑式土器文化は外来したものと思われる。

曾畑式土器の由来を日本内に求めることは困難である。私は朝鮮全土に分布を示す櫛目文土器に曾畑式土器の粗形を求めるものである。櫛目文土器と曾畑式土器との文様は完全に一致するものではない。南鮮の櫛目文土器人が島づたいに九州にやって来て、その文化を伝えたのであろう。貝殻条痕文土器人に外来者の櫛目文土器人は、篋状の施文具によって施される幾何学的文様を地文に篋状の施文具で引きかいて出来る条痕を伝えたのであった。唐津海底出土の遺物はこのような状態をよく表わしたものと理解される。貝殻条痕文土器人が櫛目文土器人の真似をして作った土器がいわゆる唐津海底出土の曾畑式土器であろう。内面に篋状で引きかいた擦痕文と貝殻条痕文があり外面に幾何学的文様を施した土器がこれである。これを仮に曾畑の第1期と呼ぼう。唐津海底出土の曾畑式土器が1本の篋状のものであるのに対して櫛目文土器は櫛状の数本のもので施文されている。将来に於て唐津海底出土の曾畑式土器よりも一段階櫛目文土器に近い土器が発見されるかも知れない。

朝鮮から伝えられた櫛目文土器⁽¹⁰⁾を自分のものに消化したのがいわゆる曾畑貝塚出土の曾畑式土器に代表される土器ではないだろうか。これを第2期としよう。第2期の文化はかなり曾畑期の中でも広範囲にわたっている。

曾畑式土器の特長的文様であつた幾何学的文様が乱れ曲線化し曾畑文化期も下り坂をむかえる時期が日勝山にみられる土器ではないだろうか。これを第3期と呼ぶ。

第1期から第3期までを曾畑式土器文化期とする。この曾畑文化期は時間的にかなり短い時期であつたのではなかろうか。それは貝殻条痕文文化期と貝殻腹縁文文化期の間に位置した事からもいえる。押型文文化期が終りを告げ、貝殻条痕文土器文化期になった直後に曾畑式土器文化が存在したと解した方

が合理的であるように思う。貝殻条痕文土器、貝殻腹縁文土器、ミミズばれの轟式等が強い関係にある以上ある地方では曾畑式土器文化期になってからもこれら広義の貝殻文土器文化は何らかの形で脈々と続いていたのかも知れない。すると曾畑式土器文化期と並行して存在したと思われる貝殻文土器文化は何であろうか。鹿児島県下から出土する石坂式土器文化ではないかと思っている。曾畑式土器と一緒に石坂式土器が出土しないことは並行関係を示すものかも知れない。九州も縄文時代前期初頭になって日本の縄文文化のあり方と歩調を合せて横の連絡をしながら発展するのである。

曾畑式土器文様の発展をみるとまず鹿児島県大口市、熊本県人吉市に分布する手向山⁽¹⁾式がある。手向山式土器文様構成をみると、押型文、縄文、撚糸文、条痕文、轟式、曾畑式土器の各土器文様を踏襲している。手向山式土器の分布は前述の大口市、人吉市つまり盆地状の所に分布するのである。

他に曾畑式土器文様の伝統は阿高式土器とよく云われるが曾畑式土器文化と阿高式土器文化との時間的間隔が大きい。

曾畑式土器文化は縄文早期に於て全国的な変移を示す撚糸文土器群、押型文土器群、沈線文土器群、貝殻条痕文土器群という文化の推移の型として生まれたのではなく、本来外来文化であったのである。

しかしその文化は九州全土に広まることなく、九州の西北部から南部にかけて一時期他の文化を押ししてしまうのである。だが全国的な力でおしよせて来る広義の貝殻条痕文土器文化に吸収されてしまい、影をひそめてしまうのである。

本来ならば外来文化は既存の文化を指導する例が多いように思えるけれども、曾畑式土器文化については、伝える側の立場と受入れる立場とが一致していなかったと云えるのではないかと思う。

曾畑式土器文化期内に於て内的な変化はあったが、九州の縄文文化の発展に影響したかどうかの判断については現在のところ何とも云えない。

註

- (1) 芹沢長介氏。
- (2) 図版1 松岡史氏所蔵。
- (3) 図版2 熊本市博物館蔵。
- (4) 木村幹夫氏「薩摩国伊佐郡日勝山土器について」考古学7-9 昭和11年。
- (5) 「佐賀県小城郡三日月村大字東分竜王遺跡について」教育佐賀 昭和33年。
- (6) 松岡史氏教示。
- (7) 隈昭志教示。
- (8) その後、松本雅明・富樫卯三郎氏「轟式土器の編年—熊本県宇土市轟貝塚調査報告—」考古学雑誌 第47巻第3号 昭和36年12月 が発表された。そこではミミズばれの縄痕文を曾畑式より古いとされているが、本稿においては充分利用できなかった。
- (9) 乙益重隆氏、坂本経堯氏、田辺哲夫氏、調査（未報告）。私の卒論のために特に許しを得た。
- (10) 藤田亮策氏「朝鮮考古学研究」昭和23年。
- (11) 賀川光夫氏 日本考古学講座3 昭和31年。

（『熊本史学』第23号，熊本史学会，1962年）

3 肥後国宇土郡花園村大字岩古曾字曾畑貝塚

清野 謙次

第1章 曾畑貝塚研究記録の考古学上に特に重要な理由

ソバタ貝塚は曾畑田と書くのが正しいらしいが、諸報告には曾畑と書いてある。曾畑でソバタと発音出来るから私も曾畑と書くこととした。

曾畑貝塚は石器時代土器研究者によつて細形刻紋または細直線紋と呼ばれる特色ある紋様の土器を出すので九州に於ける有名な貝塚である。殊にこの紋様が朝鮮の石器時代土器の或る種類と至大な関係があるし、また琉球の石器時代土器と関係が深いので、考古学者によつて大いに注意せられた。

ところがこの貝塚は今日全滅に近い姿となつてしまつた。後述の如く、私はまさに開墾せられようとする直前にこの貝塚を発掘して数100片の土器片を採集し得た。そしてまだ残地があるので貝塚はこの残地にも残存すると思つて居つた。後年、九州の石器時代土器研究家小林久雄氏に面談した所が、貝塚の残地は殆んどなく、土器の小片を少数採集し得たのみであつて、私の採集し得たる如き大破片はもはや見当たらないと聞いてびつくりした次第であつた。

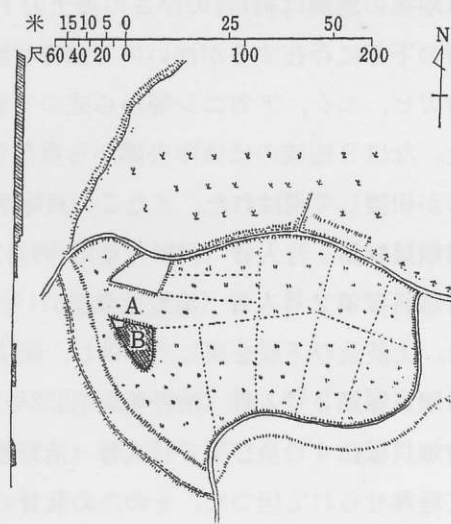
それだから私の蒐集が曾畑貝塚最大の遺品であつて、この蒐集に基づける記載が曾畑貝塚発掘の最も精細なものだといへる。それで以下の記載は簡単ではあるが、考古学の資料として重要である。

第2章 発掘の概要と人骨の出土状態

大正11年3月に、私は別記の如く（第1部第4篇）肥後国当尾村大野貝塚を発掘した後に、その発掘品を荷造した。それが了つてから熊本県史蹟調査委員であつた所の古賀精義氏に案内せられて、麗らかな春光を満身に浴びつつ人力車上にゆられながら北方里余を隔つる曾畑貝塚に着いた。

曾畑貝塚は轟貝塚（第1部第2篇）と阿高貝塚との中間部に位置する。貝塚から南方には山をめぐらし、西から北にかけては遠く肥後の水田平野がひらけて居る。この貝塚は僅かに高まつた丘の上に在つて、その大部分は桑畑になつて居る。ただ貝塚西南端の一番低い所は、私の訪れた当時には土採りの作業中であつたから、荒らされて居つた。

貝塚のこの部分の地主は曾畑の人で木村定次郎氏といつた。私等は同氏を訪うて来意を告げ、再び貝塚へ行つた。木村氏の話では自分の所有地の一部に貝塚があつて、地味が悪いから貝殻と土壌とを運び去つて低い水田にする筈で、目下土工に着手中だといふ。目下残つて居る所は水田上約3尺高い畑地（第1図のB）30坪ばかりの所であつた。この部の断層を検査すると2尺内外の厚さの貝層が見える。地つづきの既に土取りしたAの部分から人骨が出たといふ。人骨の1片を棄てたといふ場所を捜した所が人骨片が出た。それはまぎれもない石器時代人大腿骨の特長を具へて居たから、私はこの残部すなはち図のB部位を発掘すべく決心した。しかるに遺憾ながらこれは当時突然に出遭した事件であつて、さらに引続い



第1図 曾畑貝塚付近地形図

てこの地に滞在する余日がなかつたので、他日再び発掘の目的で来訪することとして、その時までには残部に手を附けないこととし、従つてまた水田を作れない間の損害は私が負担する約束が成立して、一まづ私は京都へ引き上げることとした。

木村氏と話して居る内に、私はこの人と若干の因縁に結ばれて居る間柄であるのを知つた。私が大正9年に轟貝塚と阿高貝塚とを発掘した時に、同地方の住民から明治初年にこの両貝塚の貝殻を採って石灰に焼いた人があつたと聞いた。そして轟貝塚の人骨の多く出る部分はこの時に失はれたといふ話であつた。ところがこの木村氏がこの貝殻焼きの当人であるのを知つてびっくりした。すなはち木村氏は当初この曾畑貝塚の貝殻を焼いて居たのであつたが、貝殻の分量が減少して来たので轟貝塚と阿高貝塚とへ出掛けたのだといふ。惜しむらくはかくの如くにして、この3大貝塚の貝殻の厚い部分は研究せらるることなく失はれて、貝層の薄い土まじりの部分だけが残つたのであつた。しかしその後には貝殻を焼いて石灰を採るのは採算上、引合はなくなつたのでこれを止めたといふ。

かくして私は曾畑貝塚から京都へ帰り、満1年後の大正12年3月2日から宮本博人君と共に曾畑貝塚の発掘に取り掛かつた。前述の如くA地点は前年発掘せられて既に水田と化して居つたがB地点は発掘の約束で残されて居た。木村氏との話では古くはA、B周囲の水田一面にも貝殻が在つたのだが上記の如く明治年間に掘下げて水田とせられたのであつた。そしてB部が大貝塚の最後の残存部であつたのを後に知つたが、発掘時には北方桑畑にも貝層が延長して居ることと思つて居た。

宮本君と私とはB地点の東北端から人夫を傭つて発掘を始めた。熊本からは古賀文学士等も来り授けられた。

3月2日は天気がよくて南地の空は暖かつた。午前中に私は宮本君と現場に居つたが、午後には現場を宮本君に托して、古賀氏と共に下益城郡六嘉（ろつか）村貝塚を訪うた。それは拙著『日本人の研究』（大14）第73頁に示した如くこの貝塚からも人骨を獲たのであつた。

自動車を飛ばして3里離れた六嘉村を訪うて再び自動車で帰つて来ると、私の不在の間に宮本君は、やや完全な人骨と不完全人骨との2体（曾畑第2号及び第3号人骨）を掘出して居つた。発掘は3月3日と4日との合計3日間継続してB地域の全部を発掘し了つたが、不完全人骨をさらに3例加へ得たのに過ぎなかつた。

B地域の地層は約1尺の厚さの表土の下に厚さ1尺から2尺5寸の黒土まじりの貝層がある。人骨は貝層の下部に存在するが浅いので保存状態は不良であつた。貝殻は海産でカキ、ハマグリ、サルボウ、アカガヒ、ニシ、アカニシ等から成つて居た。石器若干のほか、後述の如く、特色ある土器片が多かつた。なほB地域のほぼ中央部から重なり合つて、後掲の如く、40個近くのハマグリの殻に穴をあけたものが相接して現はれた。またこの貝塚から出土した6例の人骨に就て記載すると次の如くである。

曾畑貝塚第1号人骨（清野蒐集第199号） 第1回探訪時にA地点から偶然出土して居た人骨破片。

曾畑貝塚第2号人骨（清野蒐集第571号） かなり完全な人骨で地下2尺5寸、貝層下部から発見せられた。上肢及び下肢を屈して仰臥し、頭位は東北にあり。

曾畑貝塚第3号人骨（清野蒐集第552号） 保存状態極めて不良なる人骨片。

曾畑貝塚第4号及び第5号人骨（清野蒐集第553号及び第554号） 保存状態不良。兩人骨は極めて近接して埋葬せられて居つた。そのため肢骨の一部分は相混じた。兩人骨共に仰臥屈葬、頭は東北にあつた。

曾畑貝塚第6号人骨（清野蒐集第579号） 保存不良。仰臥屈葬。頭は北にあり。

第3章 文献的記載

曾畑貝塚を学界に初めて紹介した人は若林勝邦氏であつて『東京人類学会雑誌』第5巻第49号（明23）にこれを記載した。同氏は曾畑貝塚から石斧のほかに土器片を採集し、その土器紋様として「刻み目の並行あり、斜線の交叉あり、表裏に画ける斜線あり、縄文を印せるあり」と記してある。これで見ても明らかな通り、若林氏はこの貝塚から数多く発見される代表的紋様たる細形刻紋に着目したと同時に、縄紋ある土器片も交つて居ることを記して居るのだ。

その後に寺石正路氏は『東京人類学会雑誌』第5巻第53号（明23）に曾畑貝塚に就て簡単に、この貝塚から半磨製石斧と縄紋土器片を出す由を記して居る。

大正7年に至つて中山平次郎氏は『考古学雑誌』第8巻第5号に「肥後国宇土郡花園村岩古層字曾畑貝塚の土器」といふ一文を掲げた。これは中山氏がこの貝塚の表面採集によつて獲られた土器片を基礎として、この貝塚の土器紋様を論じたものである。土器の大部分は後年の細形刻紋土器と呼ばれるものであつたが、少数の異なつた紋様ある土器片を出す由を述べて拓本を図示してある。それは阿高貝塚に多く見る所の太い凹線を使用しての曲線紋土器片（太形凹紋といはれるもの）、磨消縄紋、隆線で画いた直線及び曲線紋様である。

以上の3報告が私の曾畑発掘以前に現はれたものであつた。その後、昭和14年8月に至つて『人類学先史学講座』第11巻に小林久雄氏の「九州の縄文土器」がある。これは曾畑貝塚の発掘報告ではない。九州の先史時代土器論の一部分として曾畑貝塚に多い細形刻紋土器に就て論じてある。

こんな次第だから曾畑貝塚で初めから問題になつて居るのは特色ある細形刻紋土器であつて、石器は一向問題にならない。それは石器が1個2個の少数しか出なかつたからである。ところが後年土器の破片は多数発見せられたのみならず、細形刻紋の類例が朝鮮から発見せられたのみならず、琉球の先史時代土器にも類例があるのでこの貝塚土器は考古学者の特に注意する所となつた。

こんな次第なので南鮮から北鮮に亘つて出土する所の細形刻紋の類品に就て手近にある文献から記述する。

昭和10年に齊藤忠氏が『考古学雑誌』第25巻第6号（昭10）に「慶尚南道蔚山郡西生面出土の櫛目文土片」として図示して居るし、山本博氏は「西日本の弥生式問題」（『考古学雑誌』第25巻第12号，昭和10）中に、慶尚南道牧之島，平安南道竜岡郡海雲面，咸鏡北道城津郡津面，同慶興郡雄基面，京畿道慶州郡九川面，同江華郡下道面から発掘せられた同種土器を図示して居る。後藤守一氏も、『東洋考古学』

（昭9）の中の「日本考古学」部第483頁以下に櫛目紋土器の総合的記述を行つて居るし、藤田亮策氏にもこの種朝鮮発見類似土器に就ての記述がある。

第4章 発掘遺物

1 馬歯

自然遺物中で特に記して置かねばならないのは、曾畑貝塚から1個の馬白歯（長1寸9分）を発掘したことであつて、馬がこの時代に既に飼養せられて居たのが分る。

2 貝輪

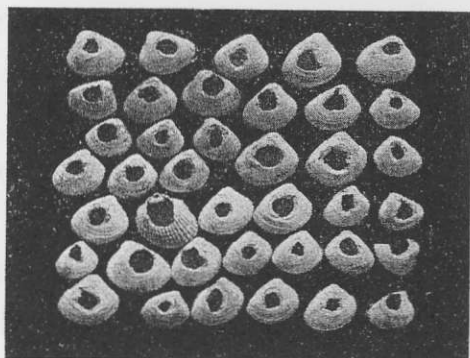
発掘の概要で記述した如く、B地域の中央部に近い小区域に図に示せる如く多数の貝輪が発見せられたが、その中の約3分の2，39個の貝輪を図に示した。その中のただ1個だけが図に示す如くアカガヒ製の貝輪で、その他はハマグリの大形のものである。このアカガヒ貝輪の大きさは3.2×1.8寸で、孔は

2.0×0.8寸の大きさに穿たれて居る。ハマグリ穴もアカガヒの穴も極めて粗末に穿たれて居つて、穴の周囲は単に打ち欠いただけで毫もすり込んでいない。また貝殻の表裏共に研いだ跡がない。

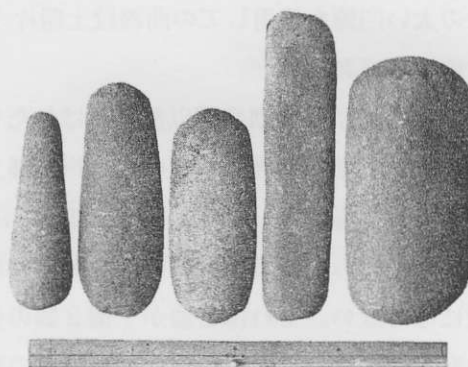
この多数の貝輪の出た辺には貝塚の貝層は切れて居つた。そしてこの貝輪群の穴の中へ1本の紐が通してあつて、古くこれを連ねて居たが、紐は腐つて消失したと思つても差支へない位置で発見せられた。

アカガヒ製の腕輪は石器時代人骨の前膊部にはめ込まれたまま発見せられたが、それは通常精巧な貝輪であつた。穴の縁部もすり磨かれて居つたし、貝殻の表裏面も平滑に研磨されて居つた。ただしここに見る程度に近いアカガヒ製貝輪であつても、腕輪たり得るのであつて、曾畑貝塚に近い轟貝塚の人骨はこの程度に近い粗製貝輪を佩用して居つた。それは京大考古学教室から報告した私の「肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚人骨報告」(『京大考古学研究報告』第5冊、大9)に記しておいた。

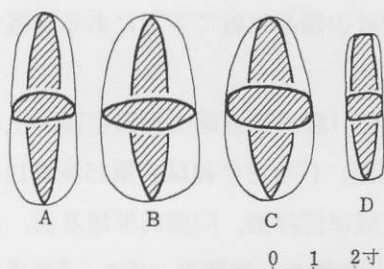
しかしこの場合にはアカガヒ製貝輪はハマグリ製貝輪と一所になつて居る。ハマグリ製貝輪が腕輪に使用せられた例はまだないし、またこの39個の貝輪の穴には腕輪に使用し得ない程小形の穴もある。そ



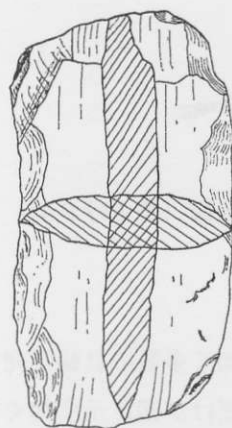
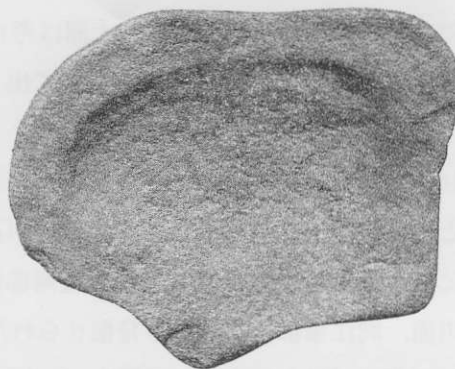
第2図 曾畑貝塚の一区より発掘の粗製貝輪写真



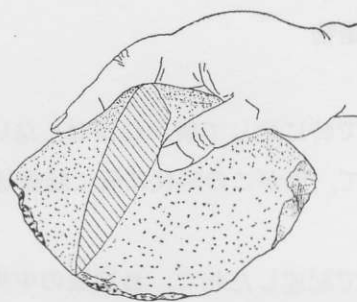
第3図 曾畑貝塚出土の石杵、石皿写真



第4図 曾畑貝塚出土の磨製石斧の型式模式図



第5図 曾畑貝塚出土の打製石斧実測図



第6図 曾畑貝塚出土石庖丁使用法想定図

れでこの貝輪は多分腕輪用のものでない。従つてこの貝輪群は腕輪たる目的で作られたものでない。他の目的の用品であるが穴に紐を通じて装飾用に使つたものやら、或いは他日夫々必要な目的に使用するために紐を通じて保存したものやら分らない。しかし珍しい所見として注意すべきである。

かつて大野雲外氏は三河貝塚から出土した多数の貝輪に種々の大きさの穴を穿つたものを並べ写したことがあつた。それはここに写したものとは異なつて一小局所から発見せられたものではなく、貝塚の各所から発見せられたものであつたが、これを穴の大きさに順じて並べて、まづ小さな穴を穿つて後に次第にこの穴を拡大して貝製腕輪に見る如き大穴ある貝輪にしたものと解釈した。これに対して江見水蔭氏は、穴の小さい貝輪は貝輪の未製品のみだと考えるのは宜しくない。或る程未製品もあるだらうが、小穴を穿つたままで別の用途に使用せられた場合もあるに相違ないと考へた。水蔭氏の批難の方が尤もである。

また私達はこの貝塚をかなり広く発掘して石器は相当数出したのに拘らず、骨器角器の類を全然採集し得なかつたのは注意を要する。

3 石杵

曾畑貝塚から割合に多数の石杵を発掘したのはこの時代に既に原始農耕によつた収穫で一定度の穀食が行はれたのを示すものではあるまいか。私達は下の写真に示す合計5個の石杵を得た。その横断面は円形ないし楕円形の長形である。自然に長味を帯びた河原石を採り来つて多少の加工——側面研磨を加へて規則正しい形にした。そしてその上下端にはすり跡或は叩き跡が附いて居る。

第3図の右端の品から左端の品へと計測して見ると表の如くである。ただし重量は秤の都合上、gで示した。

番号	長さ	中央部直径	重さ
1	4.2寸	1.8×1.7寸	700 g
2	4.9	1.0×0.9	290
3	3.4	1.4×0.7	240
4	3.8	1.3×0.7	190
5	3.2	0.9×0.6	100

4 石皿

小形の品がただ1個出た。それは第3図下に示した品で関東発見石皿とは少々形式が異なつて居る。大きさは5.5×4.3寸で厚さ0.5寸、重さ610gである。裏の凸面は美しく磨かれて居り、表の凹面には多数の小さい叩き跡を留めて居る。

5 磨製石斧

磨製石斧は11個出土したから、曾畑貝塚で多く発見出来るものだといへる。すべて両刃の石斧で多くは短冊形だから柄の部分も刃の部分もその幅が大して差がない(11個中の10個まではそれである)。ただ1個のみが柄部がやや著しく狭くなつて居る。製作法としては石斧の形状に近い自然石を採り来つてこれに多少の加工を施して石斧の形状にすり上げたものが多い。加工法の一部として自然石面に多少打撃を加へて形を整へたものもあるので、胴の一部分に打製の跡を留めて半磨製石斧といふべき形のものもある。

中央部の横断面からいふと、大体に於て4型式がある。その中のA型はただ1個であるが横断面半月形であつて石斧の一面は平たい。これは片刃の傾向が著るしいが、実際の片刃石斧は遂に見られない。

B型は曾畑貝塚に多い。11個中の4個がこれである。この型式は横断面レンズ型を呈するが分厚いものと薄いものとある。C型も曾畑貝塚に多く11個中の4個である。D型はC型の一部と考へてよいものだが、石斧は分厚くて細長い。のみといはるる種類であるが、朝鮮に少なくない。C型の横断面は楕円形ないし丸味のある四辺形ともいふべきものである。11個の石斧の大きさと形状とは次の如し。

番号	長さ	幅	厚さ	型式	破損の有無	重量
1	4.6寸	1.5寸	0.8寸	A	完全	235 g
2	4.5	2.0	0.7	B	完全	250
3	4.0	1.5	0.5	C	完全	125
4	4.3	2.2	0.8	C	完全	420
5	4.0	1.3	1.0	C	完全	230
6	5.1（以上）	1.9	1.4	D	刃部欠	640
7	3.5（以上）	0.8	0.6	D	柄部欠	100
8	2.7（以上）	2.0	0.3	B	柄部欠	130
9	3.5	1.6	0.4	B	完全	100
10	3.6	1.8	0.5	B	完全	170
11	3.7（以上）	1.7	0.6	C	刃部欠	320

6 打製石斧

打製石斧は4個出た。その1個をここに図示するが、いずれもこれに似た長方形である。用石は雲母片岩、硬砂岩のほかに黒青白色の紋をまじふる美しい蛇紋岩製のものが1個あつた。大きさは下に記す通り。

番号	長さ	幅	厚さ	重さ
1	5.1寸	2.3寸	0.6寸	340 g
2	4.0	2.0	0.3	150
3	3.0	1.7	0.3	110
4	4.5	2.3	0.6	410

7 石庖丁

石庖丁といへば満鮮の石器時代遺跡から出土するスレート製磨製石庖丁を想起せしめるが、曾畑貝塚からその形式のものは発見せられなかつた。以下述べんとする3品はその用途からいつて石製庖丁といふべき品であるが類品を余り見ないものである。

第1種は使用法を想像して図示した品で淡褐灰色の硬砂岩製の磨製品である。長さ5.3寸、幅3.8寸、厚さ0.8寸の大形分厚の品で、どうもスレート製石庖丁とは余り似て居らない。どこまで関係があるかは後来の研究を要するが、大野延太郎氏「石鋸に就て」（『人類学雑誌』14-161, 明32）の中にいく分これと似た品が3個ある。ただし大野氏の品は破損品ばかりであるからよく分からない。出所として大野氏の3と4は、北海道室蘭、5は武蔵国西ヶ原だといふ。

第2の石庖丁は第1の品と大分異なつた形で半磨製石斧の一種と解してよいかも知れない。淡黒色片岩製で鋭い刃が附いて居る。石斧にしては側面にも刃が附いて居つて異形だ。長7.0寸、幅2.3寸、厚さ0.6寸の大形品である。

8 土製紡錘車

黒褐色の土製品である。直径2.1寸、厚0.6寸。大形で中央部に穴がある。表面はへらでなでて平らにされて平滑だが、少し角張った所が残つて居る。南鮮の石器時代から土製紡錘車の発見が稀でないが、曾畑貝塚からこの品を発見したことは曾畑文化と朝鮮石器時代文化とをさらに一步近寄せたこととなる。そして曾畑住民は既述の如く原始農業を営んで居たと共に大陸式紡織を行つて居たと思ふべきである。

9 土器

土器の特色は褐色のものが多く、時として黒色のものもある。厚さは概して薄手（2-3分）のものが多く、時として3-4分の中厚手のものもある。土質は砂を含むこと少なくして比較的堅硬、時として雲母の混入の著明なものがある。森本六爾氏はこれを滑石末の混入と解して関東の繊維土器にこれを比して居る（「滑石混入の縄紋土器」『考古学』第5巻第10号、昭9）。土器の表面は研磨せられて居るが充分でない。器物の形状は深い鉢形或は浅い鉢形に限られて居る様だ。殊に前者が多い。口径は4-7寸のもの、つまり中形土器が多い。大形破片を測つた所が、直径4寸のもの2個、5寸のもの6個、6寸のもの5個、7寸のもの7個、8寸のもの1個、9寸のもの1個あつた。

土器片には紋様のあるものが多い。そして紋様の8-9割は細形刻紋だ。縁は平縁であるが、口唇部に連続切り目を附して、きざみ縁としたものが少なくない。細形刻紋の印せられた土器は悉く平縁で波縁はなくまた把手もない。それは土器の形態図に示せる如くである。ところが、5阿高式紋様のある土器、8曲線縄紋のある（鐘ヶ崎）土器には縁瘤が造られたものもある。また、4みみず膨れ線で紋様を附せられた品の中には小把手ともいひ得べき突起が縁に附されたこともある。

紋様は土器の表面に附してある。縁に沿つて紋様帯となつて居るだけの場合もあるが、しばしば縁を越えて胴腹部にまで及んで居る。しかし底に近い所は紋様がない。

割合に多数の場合（約2-3割位）縁の内側に沿つて内紋様が附されて居る。これは当然外開き土器に多いが、直壁の口の開きの少ない土器にもこれを見ることがある（他の貝塚では内紋様は平たい皿以外には余り見ないものである）。この内紋様は列点紋、列線紋、或は両者混用の簡単なもので縁に沿つて带状に画かれて居る。

土器の内面と外面との中間部、すなはち口唇部には、往々きざみがある。ただしきざみの幅の広さは種々である。そしてまた、ここには貝殻の圧痕紋が印せられて居ることもある。

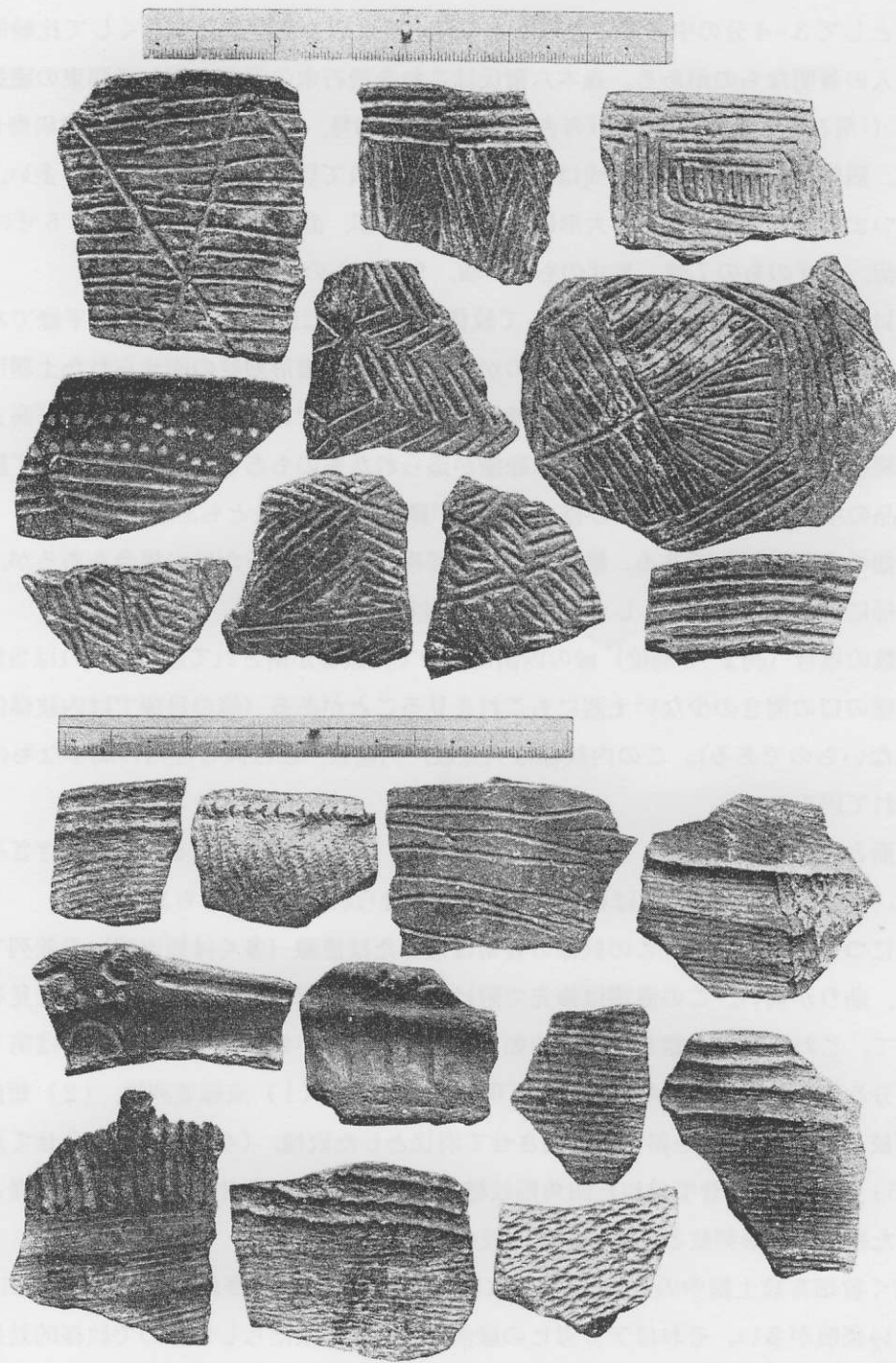
細形刻紋について考へると、この紋様の要素は点または直線（多くは短直線）の並列である。稀に曲線もあるが、曲りが弱い。この直線は棒先で附けられた沈紋だが、稀には凝爪形紋に見る様な節が附いて居る。さて、これ等要素を組合せて次の如く細形刻紋が画かれて居る。その大要は第7図写真を見ていただければ分るが、組立てられた紋様として現はれるものは（1）点線並列紋、（2）短直線或は長めの直線の並列紋、（3）短直線を斜めに並列させて羽状とした紋様、（4）直線を組合せて重複三角形に近い紋様、（5）直線を組合せて重ねた四角形紋様、（6）直線を組合せて重ねた菱形紋様とする。かくして出来上つた紋様が細形刻紋として特異な印象を生ずるのだ。

上記の如く曾畑有紋土器中の8-9割までは表面に細形刻紋が印されて居つて内面には仕上げの時に附いたらしい条痕が多い。それはアカガヒの縁部で搔いて出来たらしいもので紋様の効果を帯びさせたものではない。

残りの数少ない紋様の内で割合に多いものは阿高式紋様（太形凹紋）といはるもので、またこれは南福寺貝塚土器の紋様にも似て居る。ただしこれは小林久雄氏のいふ所の阿高式末期のもであつて、太

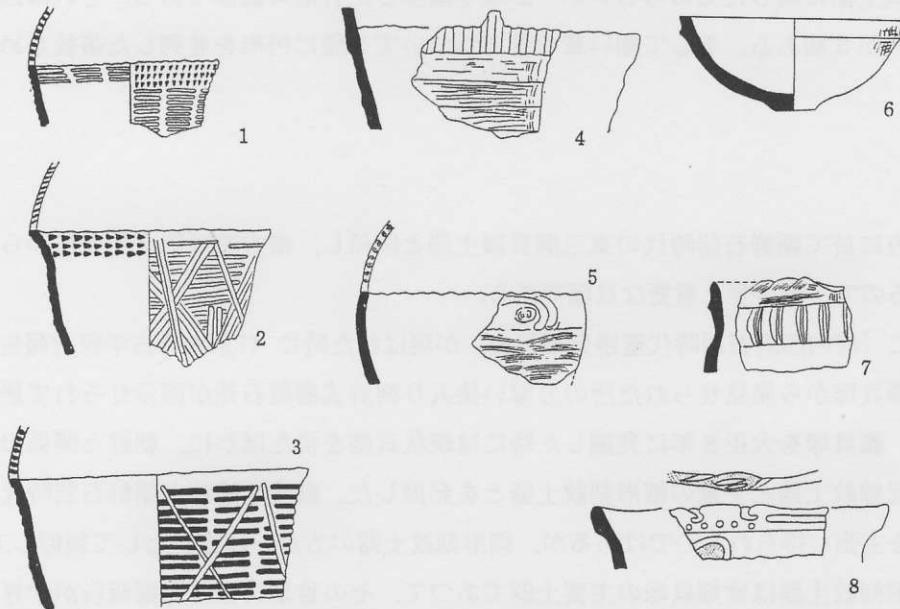
形凹紋帯が狭いものが多いのみならず紋様が簡素で瘤縁も見られる。ただしこの阿高式土器は細形刻紋土器よりも分厚に作られて居て焼きが赤い。器形は両者大差ない。またこの類は浜田、島田、小牧氏の「肥前国有喜貝塚発掘報告(下)」(『人類学雑誌』第41巻第2号, 大15)では曲線絡縄紋といはれた類だが、曾畑貝塚では曲線の種類多からず、また複雑でない。

かくの如くして曾畑貝塚土器の中から細形刻紋土器を引去り、さらにまた阿高式土器を引去った残余は極めて少数の土器片となるが、その紋様は単種類でない。それはここに轟式土器と仮に命名して写真

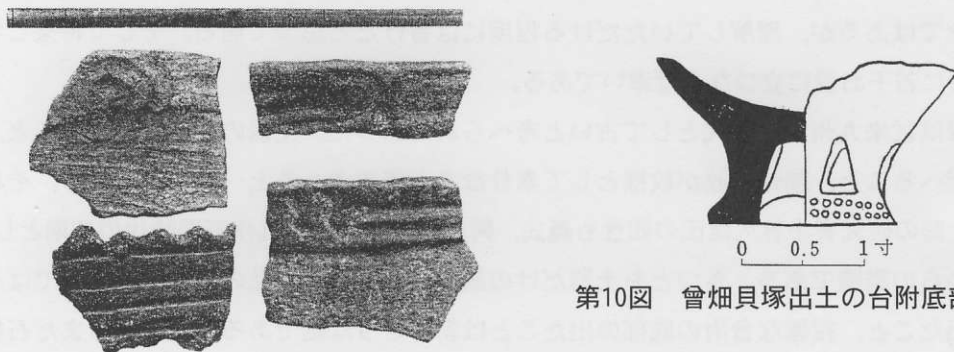


第7図 曾畑貝塚出土の土器片写真

上段 細形刻紋ある土器片(曾畑式土器) 下段 貝殻条痕紋と細隆起線紋のある土器片(轟式土器)とその他の土器片(上中央2片 中左2片)



第8図 曾畑貝塚出土の土器形態模式図（1, 2, 3 曾畑式 4 縄文 5 阿高式 6, 7, 8 鐘ヶ崎式？）



第9図 曾畑貝塚出土の阿高式土器片

第10図 曾畑貝塚出土の台附底部実測図

で示した土器片が主要なものである。便宜上これを縄文土器といふ理由は2片の縄紋の施紋された土器（縄文貝塚から縄紋の施紋された土器は出なかつた）を除くのほか、写真に示した紋様の土器はすべて縄文貝塚から出る。これは私等が発表した「肥後国宇土郡縄文村宮荘貝塚発掘報告」（『京大考古学研究報告』第5冊，大9）を参照していただければ分るが，細隆起線紋があるし，みみず膨れに似た低い高まりの帯紋があるし，長い沈線紋もある。また前期「有喜貝塚発掘報告」で細形絡縄紋といはれたものもある。

縄紋の施紋された土器は僅かに2片出た。第7図下段の向つて上左から二つ目のものと，中左端のものである。前者はたいして特徴のない縄紋であるが，後者は曲線紋様ある磨消縄紋であつて御手洗B式或は綾村A式といはれる種類かも知れない。精巧品で朱塗の跡がある。出土した地層の深さは明瞭でないが，前文に記した如く，私等の掘つたB地域は明治年間に貝殻を採り去つた残地だから曾畑貝塚深層が主として残つて居つたものである。

最後に底部に就て注意すると土器底部は，すべて平底である。ただし精細にいへばその3分の1は底の中底部が僅かに上がった平底である。底の直径は2寸5分のもの2個，3寸のもの4個，3寸5分のもの3個，4寸のもの6個であるから，口径が中形であつた割に底は大形であつたといへる。

平底が上記の如く15個出たほかに僅かに1つの台附の底部が出た。この土質は赤味があつて少し厚手

なので多分阿高式土器に属したものらしいが、かなり進歩した台附の底部である。それは図示するが如く三角形の透し穴が3個ある。そして細い葦の管でつついて2段に円形を並列した帯紋をめぐるして居る。

第5章 結語

曾畑貝塚は北方に於て朝鮮石器時代の東三洞貝塚土器と関係し、南方では徳之島遺跡からさらに琉球土器へと連絡するので、考古学上重要な貝塚である。

古く大正7年に「河内国府石器時代遺跡発掘報告」が現はれた時に（『京大考古学研究報告』第2冊、第54頁）肥後国轟貝塚から発見せられた所の分厚い抉入り朝鮮式磨製石斧が図示せられて居る。それで次篇に記す如く、轟貝塚を大正8年に発掘した時には块状耳飾を得たほかに、朝鮮と関係のあるものとして大量の細隆起線紋土器と少量の細形刻紋土器とを発掘した。細隆起線紋が朝鮮石器時代土器に若干の類似あることを主張し得られるのではあるが、細形刻紋土器の方が一目瞭然として類似して居る。

しかもこの細形刻紋土器は曾畑貝塚の主要土器であつて、その曾畑貝塚は発掘報告が学界に現はれざる前に殆んど全滅した。そしてこの貝塚の最終遺物が割合に多数私の手に残つて居る。それで私はこの貝塚に就て念入りに記述して置いた。正式報告ほど図を多数挿入出来ないし、土器の紋様拓本を全部割愛したのは残念ではあるが、理解していただける程度には書けたと思つて居る。そして将来これが九州石器時代研究者に若干お役に立つならば幸いである。

さて曾畑貝塚は従来九州石器時代として古いと考へられて居つた。土器の器形が簡単なこと、土器の土質に雲母を混へること、細線刻紋が紋様として素朴なこと等を考へると一応肯定できる。それだから九州石器時代土器の研究者小林久雄氏の如きも轟式、阿高式、曾畑式を九州石器時代の前期として居る。

それは土器からの議論である。もつとも土器だけの議論であつても、私の発掘で、1片ではあるが磨消縄紋土器の出たこと、複雑な台附の底部の出たことは新しさうな話である。それからまた石杵が多く出て穀食を想起せしむること、馬歯が出ること、紡錘車の出ることも高文化、すなはち時代の下つたのを考へさせる。ただ私達のこの貝塚発掘は、地層的に深さを定めて土層を順次に上げて行つたのではないから、年代的序次を考へる上には熟考の余地があらう。しかし曾畑式土器を古いといひ切るには未だ後の研究を必要とする。

また曾畑貝塚に共存する阿高式土器から考へると阿高後期のものだと思へないこともない。ただし細線刻紋と阿高式紋様との間には曾畑貝塚で中間紋様或は移行紋様は見当らない様である。

（『日本貝塚の研究』岩波書店、1969年）